考えることを楽しみ、自分の思いを伝えられる児童生徒の育成

飛翔

YUUBETSU TOWN YUUBETSU GAKUEN SCHOOL NEWSLETTER

2026 9 Vol.6

『湧別から広がる未来へ』

～奇跡の再会と、オホーツクの海が教えてくれたこと～

４月にスタートした今年度も前期（４月～９月）が終了いたしました。この半年間、保護者の皆様、地域の皆様には、ゆうべつ学園の教育活動に温かいご理解と多大なご協力をいただき、心より感謝申し上げます。グラウンドや校舎には子どもたちの明るい声が響き、授業や行事、部活動などを通して、一人ひとりが自分の目標に向かって懸命に歩み、大きく成長した姿を見せてくれた前期でした。

さて、節目の時期にあたり、今月の学校だよりでは「原点」というテーマについて考えてみたいと思います。「原点」とは、自分自身が迷ったとき、立ち止まったとき、あるいは人生の大きな決断を迫られたときに立ち返る、心の拠点のようなものではないでしょうか。

私には、教員として、そして一人の人間として、いまの自分を形作ってくれた大切な「２つの原点」があります。今回は、その２つの原点と先日私に訪れたある「奇跡的な出来事」、そしてそこから考える「学校の原点」についてお話しさせていただきます。



ゆうべつ学園　校長　豊原　隆之

Sec 1 第一の原点：札幌の下宿生活 ― 挫折と孤独、そして奇跡の再会

私のひとつ目の原点は、今から30年以上前、札幌で過ごした浪人時代の下宿生活です。当時の私は、希望していた道に進めず、先の見えない不安と焦りの中にいました。周囲の友人がそれぞれの新しい生活へと歩み出す中、自分だけが置き去りにされたような強い孤独感を抱えていた時期です。狭い下宿の部屋で、ひとり静かに机に向かい続ける毎日は、決して華やかでも楽しくもない時間でした。しかし、その苦しい日々を陰でそっと支えてくださったのが、下宿の管理人さんでした。

言葉数は少なくても、疲れて帰ってきた私に「おかえり、今日も頑張ったね」と温かいご飯を出してくれるその優しさが、どれほど胸に染みたかわかりません。うまくいくことばかりではない人生の難しさ、自分の弱さ、そして何より、傷ついた心に寄り添ってくれる人の温もり――。あの札幌の小さな部屋での苦悩と人の優しさに触れた経験こそが、私の最初の原点でした。

先日、実に30年ぶりに、私はその思い出の札幌の下宿を訪ねました。長い年月が過ぎ、街の風景はすっかり変わっていましたが、角を曲がると、そこにはあの日と変わらない佇まいの懐かしい下宿がありました。当時の胸の痛みが蘇り、感慨深く眺めていると、現在そこを管理されている方とお話しする機会に恵まれました。



そこで伺ったお話に私は息をのむことになります。当時、私を温かく見守ってくださった管理人さんは、すでに数年前にご逝去されていたこと。そして何より衝撃的だったのは、「この建物は長年の役目を終え、来週取り壊されることになっている」ということでした。言葉を失いました。もし訪れるのが1週間遅れていたら、思い出の建物はすでに跡形もなく消えていたでしょう。

30年という時を経て、奇跡のような一瞬のタイミングで私はあの場所に導かれたのです。解体前の建物を見上げながら、私は静かに心の中で手を合わせました。建物という形あるものは消えてしまっても、あの日々に注いでもらった優しさや苦難を乗り越えた体験は、決して消えることなく自分の中に生き続けている――

そのことを、この奇跡的な再会が強く教えてくれました。

Sec 2 第二の原点：常呂町の海 ― 新採用の朝に誓った「初志」

苦しい浪人時代を経て、教員になるという夢を叶えた私を待っていたのが、第二の原点です。それは、教員としての第一歩を踏み出した、常呂（ところ）町の海でした。

新採用として着任した日の早朝、私は一人、オホーツクの海辺に立ちました。

目の前に広がっていたのは、どこまでも続く雄大な青い海と、どこか凛とした冷たさを含んだ澄んだ風でした。波が寄せ、打ち返す音を聞きながら、胸いっぱいに吸い込んだ潮の香り。これから出会う子どもたちの顔を思い浮かべ、期待と緊張で身体が震えるような感覚を覚えました。

「この街で、子どもたちと真っ直ぐに向き合おう」

「どんなことがあっても、子どもたちの可能性を誰よりも信じる指導者になろう」

オホーツクの海に向かって、私は心の中で強く、深く誓いました。あれから多くの月日が流れましたが、指導に悩み、教育の壁にぶつかるたび、私の脳裏に蘇るのはあの常呂町の海です。あのどこまでも続く広い海を思い出すと、一瞬で心が洗われ、新採用の朝に誓った「初志」へと立ち返ることができます。



Sec 3 では、「学校の原点」とは何だろうか？

私自身の未熟だった頃のお話をさせていただき、誠にお恥ずかしい限りです。ですが、挫折の中で人の温もりに救われた「札幌の下宿」と、夢と希望を胸に未来を誓った「常呂の海」という２つの体験を振り返るとき、私の心には「では、子どもたちにとっての『学校の原点』とは一体何だろうか？」という問いが浮かんでまいります。

学校とは、単に知識や技術を学ぶためだけの場所ではありません。子どもたちが成長し、やがて広い社会へと羽ばたいていく過程で、学校が果たすべき「原点としての役割」には、２つの重要な側面があると考えます。

ひとつは、「ありのままの自分を受け入れ、包み込んでくれる安心の居場所であること」です。

札幌の下宿がそうであったように、上手くいかないとき、傷ついたとき、途方に暮れたときにも、「ここに来れば大丈夫」「自分を見守ってくれる大人がいる」と思える温もりがあること。失敗や挫折を恐れずに自己を表現できる安全な基盤となることこそが、学校の第一の原点です。

もうひとつは、「未知なる世界へ勇気を持って挑む、挑戦の出発点であること」です。

常呂の海がそうであったように、広大な未来に向かって「やってみよう」「自分には可能性がある」と胸を躍らせ、志を立てる場所であること。自分の良さや強みを見つけ、大きな夢を描いて一歩を踏み出せる背中を押すことこそが、学校の第二の原点です。

Sec 4 おわりに ― 後期に向けて、教職員一丸となって

形ある下宿の建物が解体されるように、子どもたちが過ごす学校校舎も、あるいは共に過ごす時間も、いつかは過ぎ去っていく有限のものです。しかし、子どもたちがここ、ゆうべつ学園で得た「自分は大切にされている」という実感や、「仲間と共に壁を乗り越えた」という体験は、形を失ったあとも決して消えることはありません。彼らが大人になり、人生の荒波の中で迷い立ち止まったとき、「学園で過ごした日々」が静かに心を照らし、再び前を向くための確かな道標となる――それこそが、私たちが創り上げるべき「学校の原点」なのだと信じています。

いよいよ来週から、今年度の後期がスタートいたします。

私たち教職員も人間であり、決して完璧な存在ではありません。日々の教育活動の中で試行錯誤を重ねる中、時に至らない点や、ご心配をおかけするような落ち度もあるかもしれません。しかし、「本校の子どもたちを大切に思い、豊かに育て上げたい」という情熱と意欲においては、どの職員も強い思いを胸に抱いております。

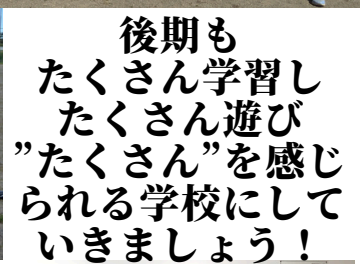
失敗を恐れず子どもたちと愚直に向き合い、教職員自身もまた共に成長してまいりたいと考えております。どうかそうした私たちの思いをご理解いただき、温かく見守り、時には励ましやご指導を賜りますようお願い申し上げます。

保護者の皆様、地域の皆様におかれましては、後期も引き続き「ゆうべつ学園」をよろしくお願い申し上げます。









後期も
たくさん学習し
たくさん遊び
”たくさん”を感じ
られる学校にして
いきましょう！